

ユダヤ系女性作家アンジア・イエゼルスカの
『大黒柱』^{ブレッド・ギヴァーズ}における、移民の娘の成功と挫折

徳永由紀子*

**Success and Failure of an Immigrant's Daughter in
Anzia Yeziarska's Bread Givers**

Yukiko Tokunaga*

Abstract

Anzia Yeziarska's *Bread Givers* can be read as an American success story, in which the narrator-protagonist Sara Smolinsky, an immigrant's daughter, works her way through American college and becomes a school teacher. Denying and breaking away from her father who represents the patriarchal Jewish traditions, she succeeds in acquiring her new identity as an American. But the close analysis of the novel reveals that it is also a story of her failure as a daughter. When she is reconciled to him, reevaluating him and realizing her ineradicable Jewishness, she returns to him as a wife and a mother, or surrogate of mother. This paper will examine how the Jewish immigrant daughter succeeds in the Anglo-American new world and fails eventually in her quest for an identity as a daughter.

キーワード

ロシア系ユダヤ人、移民の娘、父と娘、アイデンティティ、アメリカ化

はじめに

アンジア・イエゼルスカの生涯は謎に包まれている。というよりむしろ、イエゼルスカ自身が謎であるままと望んだと言ってもよい。1880年から1883年の間に、ロシア領ポーランドの、プロツクという小さなユダヤ人の町に生まれたと言われているが、正確な生年月日、生地は明らかではない。イエゼルスカに最も近い場所にいたと考えられる一人娘、ルイーザ・レヴィタス・ヘンリクセンの手になる伝記『アンジア・イエゼルスカ：作家の生涯』にも、この点に関する明確な記述はない。むしろルイーザは、イエゼルスカが機会あ

*とくなが ゆきこ：大阪国際大学法政経学部教授〈2003.10.14受理〉

るごとに新しい出生地を「考えついた」、という事実を明らかにする。いかにもアイデンティティの定まらない移民作家としての自己を、イエゼルスカは演出しようとしたのだろうか¹。

したがって、イエゼルスカの一家がニューヨークに降り立った年代についても、正確なところは明らかではない。ヘンリクセンはここでも、それが1890年頃であったこと、そのときアンジアは8歳から10歳の間であったことを記すにとどめている²。

ただ、確実に言えることは、世紀末のちょうどその頃、ニューヨークには、いわゆる「新移民」と呼ばれる膨大な数の移民が、東ヨーロッパや南ヨーロッパの国々からそれぞれ怒涛のように押し寄せていたということである。東ヨーロッパからの移民のうち、ロシア帝国からの移民はその70パーセントを占めた。そしてその半数がユダヤ人であった。ロシア領内のペイルと呼ばれたユダヤ人指定居住地区に住むことを強いられ、貧困と政治的抑圧に苦しんでいたユダヤ人たちは、安全で豊かなより良い生活を求めて、黄金に輝くと聞かされた「約束の地」、アメリカへ渡ることを選んだのである。1881年のアレクサンドル二世暗殺に端を発する、ポグロムと呼ばれるロシア民衆による集団的な襲撃や虐殺、住居の破壊も、ユダヤ人たちのアメリカ移住に拍車をかけた。1881年から1920年までの40年間にアメリカへ渡ったユダヤ人の数は、205万人以上にもものぼる。世界のユダヤ人人口の分布をも変えることになったこの大規模な移動の、ともかくそのただ中に少女アンジアもいたことになる。

イエゼルスカは長い間、アングロ・サクソン系男性作家が正統とされてきたアメリカ文学の世界にあっては、忘れられた作家であったが、最初に活字になった作品である短編「無料の憩いの家」(1915年)以来、一貫して、ニューヨークの移民街、ロウアー・イーストサイドを舞台にしたロシア系ユダヤ移民女性たちの物語を描いた。彼女たちは、言葉も文化も宗教も異なるアメリカ社会において、自分が何者であるのか、どのように生きるべきかを、激しく、そして執拗に問い続ける。新世界における自分たちの居場所を、彼女たちは懸命に探し求めるのである。

代表作『^{フレッド・キヴァース}大黒柱：旧世界の父親と新世界の娘の闘争』(1925年)の主人公であり語り手でもあるサラ・スモリンスキーもまた、その一人である。貧しい移民一家の末娘であるサラは、副題に示されるとおり、新世界アメリカにあってもユダヤの伝統を守り続けようとする父親と激しく対立しながら、苦学の末、公立小学校の教師となる。本論においては、サラのアメリカ社会における自立の過程を詳しく検討し、それが移民の娘の成功物語であり、しかし同時にまた挫折の物語でもあることを明らかにする。サラはアメリカ人としての新しいアイデンティティの獲得には成功するが、娘としてのアイデンティティの追求に失敗する。

I. 移民の娘の成功

1. スモリンスキー家の人々

スモリンスキー家の構成をまず確認しておきたい。

サラの父、レブはタルムード学者である³。タルムードを研究する学者や学生は、ユダヤ民族の宗教や伝統、文化の権威として、ユダヤ人社会においては人々の信頼と尊敬を集める存在である。イエゼルスカ自身の父もタルムード学者であったが、スモリンスキー家の父親をタルムード学者として設定したことには、自伝的な要素が反映されている以上の重要な意味がある。彼は単に、家族に対して絶対服従を強いる特権的な一家の長であることを越えて、何千年以上にもわたって男性優位を誇ってきたユダヤ人社会やユダヤ文化の象徴となっているからである。サラの眼には、「ヨーロッパから持ってきたサテンの長衣」(203)を着たレブの姿が、「まるで聖書からふと抜け出てきたよう」(203)に見えることや、「イザヤ、エレミア、ソロモン、ダビデ全員が」レブの「年老いた顔に合わさっている」(203)ように見えることに示されるように、レブの身体そのものがまさしくユダヤ性を体現している。したがって、サラと父との関係の中に描かれるのは、サラとユダヤの文化や伝統との関係ということになる。

母のシェナは、もともとは裕福な商家の娘であり、14歳の時に、父親と結婚仲介人が優秀なタルムード学者と見込んだレブと結婚したのである。東欧のユダヤ人社会の富裕層の間では、将来有望なタルムードの学徒を娘婿にすることが伝統的に好まれた。そうすることによって、男性の側は経済的な援助を与えられ、家やシナゴークにこもって研究と祈りに専念する生活が可能となり、一方また女性の側も、身内にタルムード学者を擁することは一族の誇りとなった。レブとシェナは、「働かない」学者の夫と、一家の経済活動を支える献身的な働き者の妻という、東欧のユダヤ人社会に典型的な学者の夫婦として設定されているのである。

ところが興味深いことに、イエゼルスカがこのユダヤの伝統に根ざした両親の間に設定したのは、ユダヤ家庭における順当な後継者となるべき息子ではなく、ベッシー、マーシャ、ファーニャ、サラという、上は23歳から下は10歳までの、四人の娘たちであった。スモリンスキー家における、この息子の不在の意味、そして重要性は、本論の後半において詳しく検討して行くことになるが、年齢幅のある四姉妹、さらにそこに母親を加えるなら、年齢の異なる五人の女性を一家内に配置したことによって、イエゼルスカは、20世紀初頭の移民社会における女性たちの体験の多様性、そしてその変遷を描き出すことに成功している。激しく変貌し続けていた当時の移民社会においては、たとえ同じ家族の同じ女性の間であっても、何年頃に何歳で移住してきたのか、あるいは移住後アメリカで生まれたのか、という時間の差が移民体験や意識の差を生み出していたからである。

2. あらすじ

『大黒柱』は、読まれることが少ない作品であるので、次に詳しくあらすじを紹介する。

物語はサラが10歳の時から始まる。一家は、ロウアー・イーストサイドの中でもユダヤ人移民街の代名詞ともいえるべきヘスター通りの、むさくるしいテナメントに暮らしている⁴。その「ヘスター通り」と題された第1部は、サラ本人よりもむしろ、父や母、三人の姉たちに関するエピソードが多く、もっぱらサラは観察者にとどまっている。しかしそ

の間に、姉たちの結婚を巡って、サラは父親に対する反感や嫌悪を次第に強めて行く。

父親は、例えば、「男性を通じてのみ女性は存在することができる」、「女性の最高の幸せは男性の妻、男の子の母となることである」、等々、常日頃からトーラやタルムードを引用しては、女性が無能かつ無価値であることを繰り返し娘たちに言い聞かせる。娘たちは、長年にわたって聞かされ続けた、いやそれどころか十何世紀以上にもわたって受け継がれてきた、ユダヤ社会特有の圧倒的な男性優位の考え方から逃れることができないでいる。家の中でサラがふと耳を澄ますと、必ずと言ってよいほど、父親の祈祷の声や詠歌を歌う声が聞こえてくることは、この家の娘たちが、父の教えと支配から逃れようがないことを示している。実際、父親は娘たちが結婚相手を自分で選ぶことを許さず、それぞれ自分が選んだ男性と結婚させる。娘たちは意思や人格のある人間としては認められず、男たち間で売り買いされる商品として扱われるのである。

17歳になったサラはついに、姉たちのようにユダヤ教の教えやユダヤ社会の伝統的な古い価値観に縛られて、父の言いなりになることを断固拒否し、自分は今現にアメリカに住んでいるアメリカ人であると主張して、家を出る。

サラは自立をする手段として、大学を出て教師になることを決意する。そのために、ロウアー・イーストサイドでやっと見つけた一ヶ月6ドルの狭くて薄暗い、穴倉のような、それでもともかく「自分が閉めることのできるドアがある」(158) 部屋に住み、クリーニング店で週給5ドルのアイロンがけの仕事をしながら、夜学に通って英語と算数を勉強する。

ところが、仕事に10時間、夜学に2時間、さらに勉強に2時間という厳しい日課を自らに課し、ひもじさにも耐え、時間を惜しんで勉強に励んでいたサラの前に、三番目の姉、ファーニャの紹介で、マックス・ゴールドスタインなる羽振りのいい青年が現れる。マックスはヴォードビル・ショーやダンスホール、レストランなど、それまでサラには無縁であった享乐的なきらびやかな世界にサラを連れ出し、そしてサラに結婚を申し込む。カリフォルニアにおける物質的に豊かな家庭生活を約束され、サラはマックスとその世界に強く惹かれる。しかし、結局はそれだけでは満たされないものを感じ、やはり教師となる道を選ぶ。サラは、現世的な快楽を捨てて学問を選んだことに、幼い頃から植えつけられてきた父親の教えが、今や自分の体内に沁みこんでいることを改めて認識し、父の元へ戻ろうとするが、父の方は逆に、マックスとの結婚を断ったサラを厳しく非難する。二人は激しく言い争い、ついに父はサラに勘当を言い渡す。

父に拒絶されたサラは、夜行列車で一人、大学のある町へ旅立つ。それまでと同じようにクリーニング店や缶詰工場で働きながら勉強を続け、四年後、卒業証書に加えて、「大学は私に何をもたらしたか」という課題のエッセイ・コンテストに優勝して得た賞金、1千ドルを手にも再びニューヨークに戻り、ロウアー・イーストサイドの公立小学校の教師となる。

しかしサラを待ち受けていたのは、母の死であった。その後サラは、教師の仕事に疑問を持つようになり、空虚感に悩まされるが、サラの勤める小学校の校長で、やはりロシア系ユダヤ移民の青年ヒューゴ・シーリグとの出会いが、サラを変えて行く。二人は婚約し、

ユダヤ系女性作家アンジア・イエゼルスカの『大黒柱』^{フレッド・ギヴァース}における、移民の娘の成功と挫折

ヒューゴに促されて、サラは父を改めて評価するようになる。再婚した相手に疎んじられていた父もまた、サラを頼りにするようになる。父は二人の結婚を喜び、ヘブライ語を教えてほしいというヒューゴの願いを聞き入れる。サラは不安を抱きながらも、ヒューゴとの新生活に父を迎えることを決意する。

3. アメリカ型成功物語としての『大黒柱』^{フレッド・ギヴァース}

ロシア系ユダヤ人移民作家の草分け的存在として知られているアブラハム・カハーンの代表作、『デイヴィッド・レヴィンスキーの出世』(1917年)は、ロウアー・イーストサイドの衣料産業の急成長を背景にした、言うなればロシア系ユダヤ移民男性版のアメリカ型成功物語である。無一文同然でアメリカに上陸した主人公デイヴィッドは、やがて業界を代表する裕福な、そして冷徹な衣服製造業者となる。『大黒柱』^{フレッド・ギヴァース}もまた、貧しい移民の娘が自らの才覚と能力を頼りに社会的上昇を遂げていくという点で、ユダヤ系移民女性版アメリカ型成功物語であると言える。サラはデイヴィッドのような大金持ちになるわけではない。しかし、いくつかのエピソードを通じて明らかになるように、サラには勤勉さ、ひとかどの人物になろうという野心、節約の心がけ、ガッツ、才覚、機転、そして機敏さ、といった、アメリカ型成功物語の主人公に不可欠な美徳や特質が付与されている。そればかりか、卒業と同時にわざわざ1千ドルという賞金をサラが獲得することには、イエゼルスカがサラの大学教育、教師としての自立に、富の獲得という、典型的な成功の夢の成就を重ねようとしたことが窺われる。イエゼルスカは明らかに、きわめて意識的にサラの自立物語をアメリカ型の成功物語として組み立てている。

またサラが一旦は心惹かれるマックスは、アメリカに到着したばかりの移民たちがまず選ぶ職業であった行商を手始めに、露天商、役者、雑貨屋など、様々な仕事につき、今ではロサンゼルス近郊の町でデパートを経営し、そのかたわら不動産に投資もするほどの財力がある人物、という設定になっている。彼がサラに語って聞かせる出世話は、典型的なユダヤ人移民の成功物語として、サラの自立物語の中に埋め込まれていることになる。

では、サラがどのように自立を達成するのか、その過程を確認しながら、移民の娘がアメリカ社会において成功するには、上に挙げたような美徳に加えて、他に何が要求されたのかを検討する。

4. 教育によるアメリカ化

サラの自立の物語は、父の支配する家から脱出するという、サラの象徴的な行為から具体的に始まる。それはサラの脱ユダヤ化を、あるいは、より正確に言えば、脱ユダヤ化への意思を意味している。そしてこの時サラの頭に、大学教育を受け、教師になろうという考えがひらめくことは重要である。ユダヤ人移民が教育熱心であったことはよく指摘されることであるが、教育を受けることこそは、移民たちがアメリカ社会に受け入れられ、そして社会的に上昇して行くことを可能にする確実な道だったのである。

とりわけ移民女性にとって、教育はさらにまた別の重要な意味があった。移住前の東欧ユダヤ人社会には伝統的に、学問が重視される風潮があったが、しかしそれはあくまで男

子の特権であって、女子が教育を受ける機会が閉ざされていた。多くのユダヤ人女性たちをアメリカへと引き寄せた大きな理由の一つは、アメリカでは教育を受ける機会が女子にも平等に与えられていたことであった。教育は、ユダヤ人女性たちがアメリカにおいて獲得することができた自由と平等の象徴に他ならなかったのである⁵。

ではサラの大学生活がどのように描かれているか、ここで詳しく見てみよう。ユダヤの父と訣別したサラが、この期間に徹底してアメリカ化（より具体的にはアングロ・サクソン化）していく過程が、明らかになるからである。

まず興味深いことは、サラの通った大学の所在地は、特定されているわけでも、架空の地名が付けられているわけでもないことである。「木々の緑が陰を落とす静かな通り」(210)があり、「人込みもテネメントもなく」(210)、「穏やかな顔とクールな眼」(211)をした「本物のアメリカ人」(210)が住み、静かで、ゆったり落ち着いた雰囲気がある、というその描写から、どうやらアングロ・サクソン文化が支配的なニューイングランドのどこかの街ではないかと推測できるだけである。ヘスター通りを始めとするロウアー・イーストサイドの通りの名や、一家が一時期移り住むニュージャージー州エリザベスは明記されていることを思い起こすなら、イエゼルスカがこの大学町に具体的な名前をつけなかった、あるいはつけることができなかったという、そのことに意味があると考えらるべきであろう。しかも、ニューヨークから一晩、列車に乗って行くような場所という設定には、そこがニューヨークの現実の移民社会とは隔絶した、完全な別世界であることが示唆されている。夜行列車を降りたサラが、早朝の薄明の中で、「妖精の国」(210)のようだと思う美しい街は、現実の、あるいは現実を模したどこかの街と言うよりは、ユダヤ人社会を離脱した移民の娘がやっとたどり着いた、「本物の」アメリカを象徴する場所と考えるべきであろう。

しかし、だからといってその場所がいわゆる理想郷として描かれているわけではない。サラはそれまで暮らしてきた移民の世界とは全く異質な新しい世界に接する中で、学内のダンスパーティのエピソードに端的に示されるように、自分は何者でもないこと、そこは自分が属す世界ではないことを思い知らされ、激しい疎外感に悩まされる。

彼女が言う「本物のアメリカ人」である他の学生たちと彼女自身との違いは、まず服装や外観の違いとして意識される。サラを驚かせるのは、「かれら」の石鹸のにおいがするような「こざっぱりした清潔さ」(212)であり、手と首の「ミルクのよう」(212)な白さである。自分が手押し車の行商人から買った灰色の服を着ているのに対して、学生たちは見たこともないような綺麗な色の、飾り気のない、真新しい、汚れもしわもない服に身を包んでいる。クリーニング店のむせ返るような蒸気の中で、汗にまみれてアイロンがけをして働いているサラには、学生たちはおよそ「人生の汚れた戦い」(213)から無縁であるかのように見えるのである。

5. 洗濯された「白い」世界

イエゼルスカは他の作品においても、アングロ・サクソンのないいわゆるアメリカ社会をやはり、白い、きれいな、一点の汚れもない、清潔な社会として捉え、しかしそのきれい

な白い世界は、移民の「汚れた、疲れきった」(103) 手で「洗濯をしてアイロンをかけられ」(103) ているのだ、と主張する。

たとえば「石鹸水」という短編において、語り手「私」もまた、サラのようにクリーニング店でアイロンがけの仕事をしながら、教師になるべく大学に通っている。しかし「私」は身だしなみに問題があるために、その名もミス・ホワイトサイドという学部長から教師として不適格とみなされる。イエゼルスカは「私」の口から、移民を閉め出す白い、きれいなアメリカに対する強い苛立ちと憤りと、しかしそれでもなお消えることのない、まだ見つからない「アメリカ」に対する期待と信頼を語らせ、結末においては、ミス・ヴァン・ネスという女性を登場させて、アメリカ女性と移民女性とのシスターフッドの可能性を示唆している。

短編「失われた『美しさ』」の主人公であるハナもまた、汚れ物をきれいにする洗濯婦^{ワッシュウーマン}である。彼女は顧客であるプレストン夫人から「芸術家」と褒められるほど、洗濯物を美しく仕上げる腕前を持っている。プレストン夫人を天使のようだと憧れるハナは、スタイヴサント・スクウェアにある夫人の邸宅の台所とそっくり同じようになるように、節約してやっと買った白いペンキで、テネメントの薄汚い台所を白く輝く、美しい台所に塗り替える。ところがハナのこの行為が裏目に出て、台所が美しくなったという理由で、家主のローゼンブラットは家賃の値上げを言い渡す。結局ハナはアメリカの正義を信じた裁判にも負け、立退きを命じられるが、その前夜、白い台所を狂ったように斧で破壊してしまう。雨の降る中、路上に放り出された家財道具の傍らに蹲るハナの姿を捉えて、短編は終わる。

6. 新しい装い

イエゼルスカはサラには、「石鹸水」や「失われた『美しさ』」に見出されるような、アメリカ社会やアングロ・サクソン系アメリカ人に対するあからさまな非難は語らせずに、むしろ「自分自身を内も外も変え」(214)、他の女子学生と同じようになる努力をさせている。毎週の給料から節約してはブラシ、手袋、靴とそれに合うストッキング、フェルトの帽子、という具合に一つ一つ必要なものをサラは買い揃えて行くが、この身なりを整えようというサラの強い意志とその涙ぐましい努力に、サラの白いアメリカへの同化が象徴的に描き出されている。

実際、服装や髪型は移民たちのアメリカ化の程度を測るバロメーターであった。到着したばかりの移民たちは「^{グリーンホーン}新参者」に見られないように、一日でも早くアメリカ人のような格好をすることを心がけた。古い衣服を脱ぎ捨て、新しい装いに着替えることは、アメリカ人としての新しいアイデンティティの獲得を、外に向かって見せることを意味していた。エリザベス・ユーエンによると、移民の娘たちにとって、当時大量生産が始まっていた既製服を身につけることが、誰の眼にも「最も明白なアメリカ化のしるし」(25) となった。しかし、彼女たちに買うことができたのは、五番街やブロードウェイの洗練された店に並べられているような良質の高級品ではなく、移民街の近所の店や手押し車で売られている一番安いものに限られていた。

スモリンスキー家の四姉妹の中で最も早くアメリカ化するのは二女のマーシャである。

美しい彼女は暇さえあれば鏡を見て、身だしなみを整えるのに熱心であるが、対照的に長女のベッシーは、家族のために働きづめに働いて、自分の身なりを気にする暇も余裕もない。イエゼルスカは、マーシャの大切にしている最新流行のピンクのキャラコの既製服を、ベッシーが着ようと試みて失敗するというエピソードを通じて、同じ姉妹であっても、新世界の規格に適合する妹とそうではない姉の差、いち早くアメリカ人に変身した、あるいは変身したかに見える妹と、変身できない姉との差をサラに語らせている。

サラが初めて自分の外見を装おうとするのは、まだ大学に入学する以前に、クリーニング店で働く他の陽気な移民の少女たちの真似をしようとした時である。サラは、なけなしのお金をはたいて買った口紅と頬紅、白粉をつけ、ブラウスにレースの襟をつけ、帽子に赤いバラまでつける。しかしそれが内面と結びつかない「偽りの顔」でしかないことに気がつき、この時サラは、むしろ頑なまでに教育によって内面の充実を図ることに期待を膨らませる。化粧っ気のないサラを見たマックスが、「ヨーロッパから身につけてきた無垢をいまだにすっかりとどめている故郷の女の子のようだ」(187)という印象を持つことにも現れているように、サラは周りの娘たちと違って、アメリカ人の顔を容易に付けることができないできたのである。そのサラをアメリカ化するためには、イエゼルスカは白い大学町という閉じられた空間と、四年という歳月を設定しなければならなかったと言える。

したがってエッセイ・コンテストの勝利者になったことは、サラが最終的に白いアメリカ社会からその一員として、しかもその成功者として認められたことを意味する。「かれら」の拍手喝さいと「サラ・スモリンスキー、サラ・スモリンスキー」という歓呼の声でサラの大学生活は締めくくられ、再び彼女は夜行列車でニューヨークへ戻ることになる。そこにはキッド革の手袋をはめ、真新しい革の手提げ鞆を手にした、すっかり変貌したサラの姿がある。四年前、周りの乗客の目を気にしながらこっそりと、しかし食べるように、新聞紙に包んだニシンを食べていたサラが、今や食堂車でチョップとホウレン草、サラダを注文している⁶。そしてその膝には、きれいにアイロンのかかった、真っ白なナプキンが誇らしげに広げられ、サラがもはやアイロンをかける側の人間ではなくなったことが示されている。白い大学町のクリーニング店で四年間、せっせとアイロンをかけ続けたサラは、ユダヤ性という自らの「汚れ」と「しわ」をも消してしまったと言えるだろう。

ニューヨークに戻ったサラが、何はさておき賞金の1千ドルでまず教師らしい服装を、それも移民街の目抜き通り、グランド通りではなく、五番街のデパートで買うのは当然すぎるほど当然である。最高級のシンプルなダーク・ブルーのスーツから、帽子、靴、ストッキング、新しい下着、手袋、さらに美しいハンカチに至るまで、頭の天辺からつま先まで、サラは生まれて初めて自分で完璧と思える装いを調える。姉のファーニャに「1マイル離れたところからでも誰の眼にもサラが教師であることが分かるわ」(247)、と嘲り気味に言われるくらいに、外見と中身が一致し、サラのアメリカ化が外面、内面ともに完成したことが暗示されている。サラは徹底したアングロ・サクソン化によってユダヤ性を抑圧し、アメリカ社会において、移民としての自立を果たし、アメリカ人としての新しいアイデンティティの獲得に成功したことになる。

7. ユダヤ系移民の足跡

ここで大西洋を渡るユダヤ移民たちが船上の食料として携えていたのが、やはりニンシであったことを思い出すなら、サラの大学行きと四年間の大学生活には、ユダヤ移民たちがたどったアメリカ移住とアメリカ化への道程が重ねあわされていると考えることもできる。身の回りのものを入れた、物干し綱で簡単に括っただけの新聞紙の包み、束ねた本、そして新聞紙に包んだ食料を手に旅立つサラの姿は、両手に重そうな荷物を抱えてエリス島に降り立った、移民女性たちの典型的なスタイルを思わせる。

そして、いよいよ大学へ向かおうとしているサラに、「地球の反対側へ出発する」(209) コロンブスや、「親類縁者を残し、故国をあとに新世界を求めて」(209) 船出していくピルグリム・ファーザーズのような気持ちだと言わせていることに明らかなように、イエゼルスカはサラの、そしてユダヤ移民の足跡をアメリカの歴史の本流に位置づけようとしている。サラがニンシとピクルスというユダヤの代表的な食料品と一緒に、一塊のパンを旅の食料として新聞紙に包み持っていることにも、同様のことが言える。新聞紙で身を隠すようにしながら、そのパンをむしっては食べるサラに、到着したばかりのフィラデルフィアの町を眺めながら、「大きなふくらんだ巻きパン」を頬張るベンジャミン・フランクリンの姿を想起するのは、あながち的外れとは言えないだろう。

さらにこのような場面もある。大学におけるサラのほとんど唯一の理解者となる学部長は、自分の祖母を例に出し、サラを自らの手で荒野を切り開いたパイオニアの女性たちになぞらえて激励する。移民女性たちもまた新しいアメリカの歴史を築いて行く存在であることが示唆されている。

II. 移民の娘の挫折

1. ユダヤ性への回帰

ユダヤ性という「汚れ」や「しわ」を消すことと引き換えに、「本物の」アメリカ人としての新しいアイデンティティを獲得したサラであったが、最終的には彼女はユダヤ性に回帰する。そしてそれは断絶状態にあった父との和解という形で示される。しかしこの大団円であるかに見える父との和解は、娘という存在がそもそも内に抱えるアイデンティティの定まらないあやふやさを、はからずも露呈することになる。確かにサラは父を再評価し、父との関係を修復するが、それはあくまで母親の死と、サラの結婚を経て初めて可能となることに注意しなければならないのである。

母親の死は、その時点ではサラ本人には未だ自覚されていない、ユダヤ性喪失の深刻さを物語っている。サラがアメリカ人としてのアイデンティティを保つことの方により重きを置いていることは、葬儀の折にユダヤ教のしきたりに従い、悲しみの表現として服の一部を引きちぎらなければならないところを、家族でただ一人サラだけが頑として拒否することにも現れている。サラにとっては、ユダヤ社会のしきたりを守ることも、ダーク・ブルーのスーツという、文字通り新しく身につけたアメリカ人としてのアイデンティティが傷つけられるのを阻止することの方が、優先される。

しかしその一方で、母親の死に際してサラが神秘的な体験をしていることにも注意しなければならない。母が息を引き取るその瞬間に、母の眼から「愛情の光」(252)がサラの眼に注がれ、サラは母親の魂が自分の魂に入り込んだように感じて気を失う。サラは母を失うと同時にその魂を受け継いだことになり、これ以降、例えば父親に対して、あるいは生徒たちに対しても、「娘の眼」ではなく、「母親の眼」で見られるようになる。サラは父に対して母親、あるいは母親の代理人になったと言えるのだろうか。

父の再評価、父との和解へとより積極的にサラを促すのは、サラが赴任した小学校の校長、ヒューゴ・シーリグである。ヒューゴは、アメリカで教育を受けた、アメリカ化したユダヤ人であり、しかもサラの出身地であるポーランドの小さい村の、すぐ近くの同じように小さい村の出身者であるという、いわばサラの最大の理解者になり得る存在として設定されている。あるいはむしろサラのジェンダー違いの分身と言った方が適切かもしれない。二人は同じ職業につき、同じ言葉話し、同じ土地の出身であり、ヒューゴは二人が「同じ血を引いている」(277)ことを特に強調する。サラはこのヒューゴとの出会いを通じて、一度は失ったユダヤ性をいわば回復して行くわけであるが、それは例えば次のようなエピソードに明らかである。

ニューヨークへ凱旋したのち、サラが新しく借りた部屋は、「テーブルとベッドと整理ダンスと座り心地の良い椅子が二、三脚」(240)あるだけの、「清潔で、風通しの良い空白」(240)以外の何ものでもないような部屋である⁷。それはテネメントの薄暗さや窮屈さ、不潔さとはおおよそ無縁の、服装と同じく、ユダヤ性という「汚れ」を一切排除した空間である。部屋を訪ねたヒューゴは、「なんてきれいで何もないんだ」(277)と、その「清潔な空白感」に目を見張る。

そしてヒューゴが訪ねたその翌朝、部屋を掃除していたサラは、ヒューゴの「泥まみれの足跡」(280)を見つけるが、その残された「汚れ」を急いで消すどころか、いつくしむかのように、箒を動かす手を止めるのである。サラはここで、「汚れ」としてのユダヤ性を受け入れている。

また、教室で子供たちの英語の発音を「アメリカ風」に矯正している内に、sing と発音すべき所を、サラ自身がつい無意識にsing-ggと訛って発音してしまう、という場面がある。公立学校の教師という仕事が、実は子供たちのユダヤ性の抑圧の上に成り立っているものであることを示すと同時に、また一方では、教育をもってしてもアメリカ化し得ないものの存在に、イエゼルスカが目を向けていることを示している。

2. ヒューゴという「息子」

そしてヒューゴ出現の重要性は何よりも、ヒューゴとの結婚によって、サラが父に待望の「息子」を与えることが可能になることにある。スモリンスキー家における息子の不在が、ここへ来て重大な意味を持つ。レブとシェナという、あまりにも「ユダヤ的」な両親の間の、順当な後継者となるべき息子の不在は、アメリカ移住後の父の権威の失墜、マスキュリティの危機、あるいは父の変容と同じように、アメリカ社会においてユダヤ民族の文化や伝統を存続させていくことの困難と限界を、まずは示している⁸。しかしそれだ

けではなく、息子を排除して、娘という視点に固執することによって、イエゼルスカがさらに問うているのは、後継者としての娘の可能性である。

ここで、娘と父との二度目の対決場面、すなわちマックスとの結婚をめぐる二人が言い争う場面であるが、その直前にまで話を戻さなければならない。父への反感から一旦は家を出たサラではあったが、物質的な豊かさのみを追求するマックスの世界に接し、改めて、自分が幼い頃から父の強い影響を受けてきたことを確認し、父との距離の近さを実感する。この父と娘の関係には、副題に示されるような旧世界対新世界という単純な二項対立、あるいは世代間対立の図式には収まらないものがある。確かにサラは父に反抗する。しかしその一方で、父親に対立し憎しみを抱くということにより、サラは犯罪者のような強い罪悪感を抱いてしまうのである。サラは父親に対して、一体感と言ってもよいような強い執着心を抱いている。

しかもサラがここで、一杯の粥のために弟ヤコブに相続権を譲ってしまう、旧約聖書にあるエサウの物語を思い出すことに注目しなければならない。自分こそが父の最良の理解者であるという自覚と自信、そして自分こそが父の後継者でありたいと願うサラの切なる気持ちが暗示されているからである。この時サラが、父の元へすぐにも戻りたいと逸る気持ちを抑えながら、自分の部屋で、父の方からサラを訪ねてくるのをじっと待ち受けている姿は象徴的である。サラはそれほどまでに父の側からの接近、承認を期待している。

そして待ちわびたサラの前に、確かに、父は現れる。しかしそれはマックスとの結婚を断ったサラを非難するためであって、父の口から出てくるのは、相変わらずの女性蔑視の言葉であり、女性の最高の幸福は妻になることと母になることだという、トーラの説くユダヤ女性の生き方の強要である。サラは自分もまた姉たち同様、「売買される最後の未婚の娘」(205)に過ぎなかったことを思い知らされる。サラのこの段階でのユダヤ性への回帰は、父の拒絶にあい、敢え無く失敗したことに、そして不在の息子に代わって、娘が後継者となる道は閉ざされたことになる。

したがって、ヒューゴという「息子」を父に与えることは、父の正当な後継者としての資格を十二分に具えながら、娘であるがゆえに後継者にはなり得なかったサラが、その限界を突破するために取り得た次善の策であったと言える。しかもヒューゴ自身が、サラの父にヘブライ語の教を請う。ユダヤ教の経典の言葉であるヘブライ語は、東欧系のユダヤ人が日常使用する言語であるイディッシュ語が「母の言葉」と言われるのに対して、「父の言葉」、「聖なる言葉」と言われ、伝統的に男子しか学ぶことができない言語とされてきた。ユダヤ文化において、ヘブライ語はマスキュリニティと結びつけられてきたと看做することができる。

ユダヤの伝統はこうして、サラの目の前を素通りして、レブからヒューゴへ、父から「息子」へと手渡されたことになる。思えば、父による自分本位の、四人の娘の結婚相手探しとは、つまるところ必死の「息子」探しだったのではないだろうか。そしてアメリカの息子ヒューゴの方もまた、サラと結婚することによって、探し求めていたユダヤの「父」を得たことになる。父と娘の和解はしたがって、ヒューゴという「息子」を介在させることによって初めて、成立したと言える。そしてその時、サラはもはや娘ではなく、妻であ

り、母あるいは母の代理人である。移民の娘の自立の物語は、娘の消滅という結末を迎えたのである。サラの娘としてのアイデンティティの追求は、ここで中断されたことになる。

3. ブレッド・ギヴァーズとしての移民の娘たち — 結びにかえて

『大黒柱』における息子の不在はさらに、移民の娘に関わるひとつの社会状況を明らかにする。それは、新世界における賃金労働者としての娘の顕在化である。スモリンスキー家も例外ではなく、アメリカ移住前には母親によって支えられてきた一家の家計は、移住後は全面的に娘たち、特に長女ベッシーの賃金労働によって支えられている。というよりむしろ、父親に経済能力を全く期待できないスモリンスキー家の場合、より鮮明な形で娘の労働が浮き彫りにされる。物語の冒頭でいきなり、上の三人の娘たちが揃って失職中であることが明らかとなるが、一家はそのため家賃も払えず、食べ物を買うお金にも事欠くありさまである。見かねたサラはニシンの行商をしてわずかばかりの現金収入を得るが、そのサラも16歳という就労年齢に達すると、紙箱を作る工場で働き、嫁いだ姉たちに代わって家計を支えるようになる。

そもそもこの小説の題名であるブレッド・ギヴァーズとは、イディッシュ語の**broit gibbers**をそのまま英語に訳したものであり、「パンを与える人たち」とはすなわち、英語の**breadwinners**と同じく、一家の稼ぎ手たち、一家の大黒柱を意味すると考えてよい。イエゼルスカはこの小説で、「ブレッド・ギヴァーズ」とは一体誰のことかと問うたのではないだろうか。二番目の姉マーシャが「私のブレッド・ギヴァー」と呼ぶ夫、モー・マースキーは、マーシャに渡すべき生活費を自分のスーツとコートを新調するのに使い果たしてしまうような、一家の稼ぎ手であることを期待されながら、その任を果たしていない男性である。働きづめに働いて一家の経済を支えていたのは、レブやモーではなく、ベッシーであり、サラであり、若き日のシェナであり、そしてさらには、ロウアー・イーストサイドのユダヤ人移民街にひしめき合う大小の工場スウェットショップで、あるいは搾取工場と呼ばれる小規模な作業場で、過酷な労働を強いられていた移民の娘たちであった。Bread Giversという複数形に端的に示されるように、この小説は、サラただ一人の物語から成るのではなく、実質的に一家の稼ぎ手としての力を持ちながら、しかし家庭内においては依然として「見えない」存在でしかなかった、あまたの移民の娘たちの物語から成るのである。

注

- 1 実際、伝記『アンジア・イエゼルスカ』は、伝記でありながら、そこからは作家のぼんやりとした輪郭しか浮かんでこない。娘は母の意図を汲んだかのように、常におおよその年齢しか記さず、家族関係はもちろんのこと、住み込みの召使やクリーニング店でのアイロンがけの仕事、お針子、ウェイトレス、料理教師をしていたという職歴、あるいは不満足であったらしいコロムビア大学における学生生活、作家修行、新聞種にもなった唐突な結婚と離婚、二度目の結婚と出産、そして別居、ジョン・デューイとの出会いと恋愛、成功とは言えなかったハリウッドでの生活、サンフランシスコやニューヨークにおけるボヘミアン生活等々、いずれも、詳細を明らかにしよ

うとはしない。

- 2 ヘンリクスンは一家の名前をイエゼルスキー-Yezierskyと表記している。両親と三人の姉、三人の兄とアンジアは、一足先にアメリカに渡っていた長兄を頼って、ニューヨークに降り立つ。長兄メイヤー・イエゼルスキーは、入国検査の際、ポーランド語の綴りと発音を理解できなかった移民検査官によって、マックス・メイヤーとアメリカ風に改名されていた。これは移民にはよくあることであった。一家もそれに倣って、アンジアはハッティ・メイヤーと名のる。ハッティがアンジア・イエゼルスカという名前を使用するのは、最初の結婚でハッティ・ゴードン、二度目の結婚でハッティ・レヴィタスと名前を変えたあとのことである。移民作家に相応しいと考えたのか、最初の作品に、アンジア・イエゼルスカを用いている。
- 3 タルムードとは、成文律法である旧約聖書と異なり、十数世紀にわたって口伝されてきたユダヤ民族の宗教上、生活上の律法をさらに数百年をかけて詳細に論じ、注釈をつけ、五世紀末に完成された聖典である。扱われる項目は、農業から祈祷、安息日や断食日、結婚、夫婦関係、民法、刑法手続等々、宗教上の掟、しきたりから日常生活の習慣まで広範囲にわたる。旧約聖書と並んでユダヤ民族の「アイデンティティの根源」とまで言われる。
- 4 ロウアー・イーストサイドの移民街に特有の五、六階建ての窮屈な安アパート。できるだけ多くの移民をできるだけ効率よく収容するために、一つのブロックのそれぞれ隙間を埋めるようにして建てられているため、陽がささず、風通しが悪く、異臭が漂い、そこでの生活は、移民社会の息苦しさ、閉塞感を、しかしまた一方では、息が詰まるほどの緊密さを表わずものとして、『大黒柱』だけではなく、他の移民作家の作品においても度々言及される。
- 5 歴史家スーザン・グレンは、その著書Daughters of the Shtetlにおいて、ユダヤ女性にとっての教育の重要性を再三指摘している。公立小学校や夜学などのいわゆる教育機関だけではなく、搾取工場という過酷な労働の場においてさえ、また労働運動のただ中においても、ユダヤ女性たちがさまざまな勉強の場を獲得していった数多くの例を挙げている。
- 6 もしこのチョップが豚肉であるとするなら、サラはきわめて非ユダヤ的な食べ物を食していることになる。
- 7 サラのアパートは、ロウアー・イーストサイドの移民街よりも北に30ブロック行った、30丁目に位置するという設定になっている。これはサラが社会的上昇を果たしたことを示している。
- 8 例を挙げるなら、母シェナは、他の多くの母親たちがそうであったように、家賃収入を得るために、三人の下宿人を置くことにするが、そのために、はるばる海を越えて運んできた本類を、父が神聖な研究と祈りの場としていた表の一部屋から一掃して、台所という女性の場へ移してしまう。あるいはまた、シェナに先立たれたレブが再婚した相手は、「働かない」レブに業を煮やし、ついにはチューイング・ガムの行商までさせる。ユダヤの象徴のような父の、あまりにアメリカ的な変容を示す興味深い例としては、「父、アメリカでビジネスマンとなる」と題された第7章に描かれる、父親が食料雑貨店を経営しようとして騙されるエピソードを挙げることができる。

引用／参考文献

- Antin, Mary. *The Promised Land*. 1912. New York: Random House Inc., 2001.
- Cahan, Abraham. *The Rise of David Levinsky*. 1917. Harmondsworth: Penguin Books, 1993.
- Cohen, Rosa. *Out of the Shadow: A Russian Jewish Girlhood on the Lower East Side*. 1918. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Charles, Ruth A. *Immigrant Women's Lives: Weaving Garment Work and Legislative Policy*. NY&London: Garland Publishing Inc., 1999.
- Diner, Hasia R. *Lower East Side Memories: A Jewish Place in America*. Princeton: Princeton UP, 2000.

- Espin, Oliva M. *Women Crossing Boundaries: a psychology of immigration and transformations of sexuality*. New York: Routledge, 1999.
- Ewen, Elizabeth. *Immigrant Women in the Land of Dollars: Life and Culture on the Lower East Side 1890-1925*. New York: Monthly Review Press, 1985
- Gabaccia, Donna. *From the Other Side: Women, Gender, & Immigrant Life in the U.S. 1820-1990*. Bloomington: Indiana UP, 1994.
- Gay, Ruth. *Unfinished People: Eastern European Jews Encounter America*. New York: W. W. Norton & Co., 1996.
- Glenn, Susan A. *Daughters of the Shtetl: Life and Labor in the Immigrant Generation*. Ithaca: Cornell UP, 1990.
- 浜野成生『ユダヤ系アメリカ文学の出発』研究社、1984年。
- Heinze, Andrew R. *Adapting to Abundance: Jewish Immigrants, Mass Consumption, and the Search for American Identity*. New York; Columbia UP, 1990.
- Henriksen, Louise Levitas. *Anzia Yeziarska: A Writer's Life*. New Brunswick: Rutgers UP, 1988.
- 本間長世『ユダヤ系アメリカ人：偉大な成功物語のジレンマ』PHP新書、1998年。
- Howe, Irving. *World of Our Fathers: The Journey of the East European Jews to America and the Life They Found and Made There*. 1976. London: Phoenix Press, 2000.
- Hyman, Paula E. *Gender and Assimilation in Modern Jewish History: The Roles and Representation of Women*. Seattle: U of Washington P, 1995.
- Kessler-Harris, Alice. "Foreword and Introduction." *Bread Givers*. By Anzia Yeziarska. New York: Persea Books, 1999. v-xxix.
- Morris, Lloyd. *Incredible New York: High Life and Low Life from 1850-1950*. 1951. Syracuse: Syracuse UP, 1991.
- 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』講談社現代新書、1992年。
 _____『ユダヤ移民のニューヨーク：移民の生活と労働の世界』山川出版社、1995年。
- Peiss, Kathy. *Cheap Amusements: Working Women and Leisure in Turn-of-the-Century New York*. Philadelphia: Temple UP, 1986.
- Rischin, Moses. *The Promised City: New York's Jews, 1870-1914*. Cambridge, Ma.: Harvard UP, 1962.
- 佐川和茂「ユダヤ人のニューヨーク」金田由紀子・佐川和茂『ニューヨーク：周縁が織りなす都市文化』三省堂、2001年。
- Schoen, Carol B. *Anzia Yeziarska*. Boston: Twayne Publishers, 1982.
- Schreier, Barbara. "Becoming American: Jewish Women Immigrants 1880-1920." *History Today* 44:3 (Mar. 94) : 25-31.
- Takaki, Ronald. *A Different Mirror: A History of Multicultural America*. Boston: Little, Brown and Co., 1993.
- 上田和夫『イディッシュ文化：東欧ユダヤ人のこころの遺産』三省堂、1996年。
- 浦川直子「様々な人種の夢」亀井俊介編『アメリカの文化：現代文明をつくった人たち』弘文堂、1992年、193-222頁。
- Wilenz, Gay. "Cultural Mediation and the Immigrant's Daughter: Anzia Yeziarska's *Bread Givers*." *MELUS* 17:3 (fall 1991) : 33-41.
- 山田史郎編『移民』望田幸男・村岡健次監修『近代ヨーロッパの探究②』ミネルヴァ書房、1998年。
- Yeziarska, Anzia. "The Free Vacation House," *Hungry Hearts*. 1920. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.
- _____. "The Lost 'Beautifulness'," *Hungry Hearts*. 1920. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.
- _____. "Soap and Water," *Hungry Hearts*. 1920. Harmondsworth: Penguin Books, 1997.
- _____. *Salome of the Tenements*. 1923. Urbana: U of Illinois P, 1995.

ユダヤ系女性作家アンジア・イエゼルスカの『大黒柱』^{ブレッド・ギヴァーズ}における、移民の娘の成功と挫折

- _____. Bread Givers: a struggle between a father of the Old World and a daughter of the New. 1925. New York: Persea Books, 1991.
- _____. Arrogant Beggar. 1927. Durham: Duke UP, 1996.
- _____. Red Ribbon on a White Horse: My Story. 1950. New York: Persea Books, 1987.
- _____. The Open Cage: An Anzia Yezierska Collection. 1979. New York: Persea Books, 1988.
- _____. How I Found America: Collected Stories of Anzia Yezierska. 1985. New York: Persea Books, 1991.